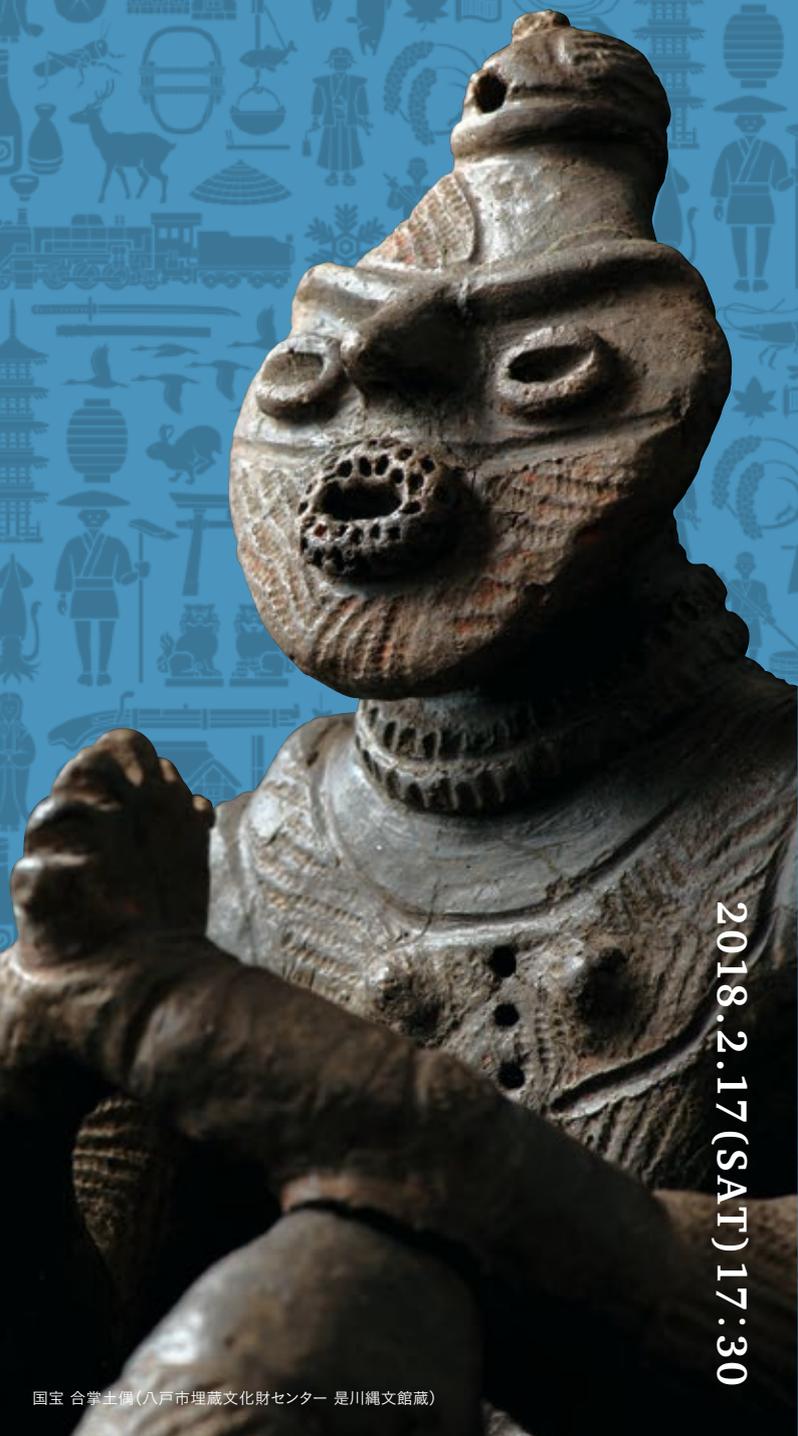


# 青森 AOMORI

## 第2部

### 青い森と海が育んだ 縄文スピリット

三内丸山からひもとく1万年の平和



2018.2.17(SAT) 17:30

## AOMORI



### 縄文時代の時代区分

	時代	青森県の主な遺跡
約15000年前 (B.C.13000)	旧石器時代	大平山元遺跡
約11000年前 (B.C.9000)		
約7000年前 (B.C.5000)	縄文時代	田小屋野貝塚、三内丸山遺跡、ニツ森貝塚、是川石器時代遺跡
約5000年前 (B.C.3000)		
約4000年前 (B.C.2000)		
約3000年前 (B.C.1000)	後期	小牧野遺跡
約2300年前 (B.C.300)		
	晩期	大森勝山遺跡、亀ヶ岡石器時代遺跡
	弥生時代	

### 講師：岡田康博氏



昭和32年、青森県生まれ。弘前大学卒業後、県内遺跡調査に携わり、平成4年より三内丸山遺跡担当。現在、青森県企画政策部理事兼世界文化遺産登録推進室長。著書に『三内丸山遺跡』(同成社)、『遙かなる縄文の声』(NHKブックス)など。



深まる  
一冊

### 「三内丸山遺跡 復元された縄文大集落 岡田康博(同成社)」

縄文時代の概念を覆した、三内丸山遺跡の発見。その発掘当初から調査に携わってきた岡田氏が、最新のデータを交えて解説する。



# 1 土偶に見る 縄文人の心の風景



講師の岡田康博氏が長く発掘調査に携わった特別史跡「三内丸山遺跡」は、国内で最大級の縄文遺跡であり、出土遺物も多量多彩。段ボール箱にして4万箱にもものぼり、土偶だけでも実に2000点以上を数える。縄文時代の土偶では、遮光器土偶がよく知られるが、これは縄文時代晩期のもの。三内丸山では縄文時代中期の板状土偶が数多く出土している。時代が下るにつれ、土偶はより人の容姿に近い、ふっくらとした造形になっていく。青森県内の他の遺跡から出土したものと併せ見ると、その変遷がよく分かる。土偶は祭祀の道具であり、神聖な色といわれる「赤」に彩色されたものもある。縄文人は「祈り」と「祀る」を生活の軸としていたと考えられている。土偶の特徴や変遷を通して、その心の風景が見えてくる。

大石平遺跡出土の重要文化財「赤彩切断蓋付土器」(青森県立郷土館蔵)

# 2 縄文集落の形成に果たした 青い森と海の役割

縄文時代は、今から約1万5000年前に始まり、1万年以上続く。青森を中心とする北東北から、北海道南部にかけての縄文遺跡群では、草創期から晩期までを通して、縄文文化の移り変わりが見られる。他の地域にはない魅力で、学術的な価値も高いことから現在、世界遺産への登録を目指している。縄文文化の特色は、狩猟・採

クマなどを模した動物型土製品もある(青森県立郷土館蔵 風韻堂コレクション)



三内丸山遺跡と同時代のものと考えられている函館市の大船遺跡



釣り針や釣は、動物の骨や角で作られていた(青森県教育庁蔵)

集を主とする人々が定住化した点にある。それを促した大きな要因が、広大な森と海の存在だ。当時、一帯はブナをはじめとする落葉広葉樹に覆われていた。生物多様性に富み、豊富な食料や生活資源を供給するこの森が、四季折々の幸をもたらす海と近接していたことで、この地での定住を容易にしたという。三内丸山のような巨大集落の形成には、そうした北東北・道南地域ならではの環境の特殊性がある。

# 3 縄文1万年の平和は なぜ続いたのか？

三内丸山で出土した黒曜石は、北海道産のほか、山形・新潟・長野産のものがある。また、装飾品にしたいと思われるヒスイは、新潟の糸魚川から運ばれてきたものだ。三内丸山の交易圏は、道南から北陸まで、海路にしておよそ1000キロにも及ぶ。これほど広い行動範囲を持ち、多様な集落と接しながら、不思議なことに縄文遺跡には、戦争の痕跡がほとんど見られない。集落間の諍いがまったくなかったわけではないが、埋葬された遺骨には武器などによる傷痕のある人骨(受傷人骨)が非常に少ないのだ。同時代のヨーロッパと比べても、その数は圧倒的に少なく、人を殺傷するための武器も見つかっていないという。世界的に見ても稀有といえる縄文1万年の平和。実は、活発な集落間・地域間の交流にこそ、その秘密が隠されている。



新潟県糸魚川産のヒスイの大珠(青森県教育庁蔵)



三内丸山遺跡出土の板状土偶(青森県教育庁蔵)

青い森と海が育んだ縄文スピリット 三内丸山からひもとく1万年の平和